

新型インフルで伊勢崎市消防本部

オゾン殺菌を導入

短時間で
高い効果 救急車や装備品に

新型インフルエンザ対策で伊勢崎市消防本部は1日までに、救急車や装備品の消毒を行うオゾン殺菌システムを県内の消防本部で初めて導入した。従来よりも短時間で100%に近い殺菌ができるほか、防護服の殺菌も行え、再利用が可能になる。流行時には多くの患者を素早く搬送する必要があり、市消防本部は迅速で的確な救急出動のために活用したいとしている。

迅速な出動に期待

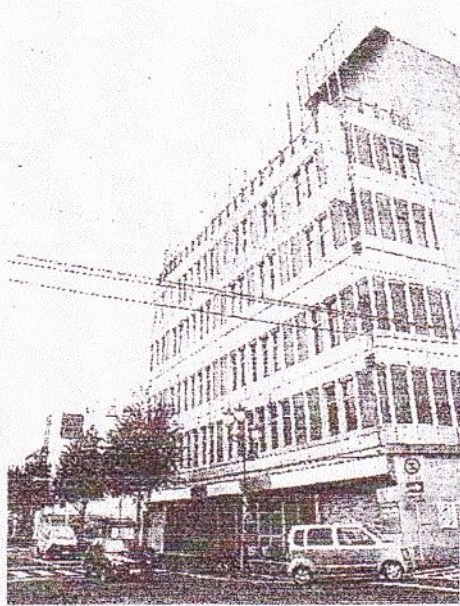
感染症患者を搬送したときなどはこれまで、救急車内や装備品を薬剤で薫蒸したり、ふいたりし、紫外線照射を行っていた。だが、ふき残す可能性があることや、紫外線の陰になる部分は殺菌できなかったり、作

業に1時間以上かかったりするなどの問題点があった。新たに導入した殺菌システムは、オゾン発生器とオゾン水生成器、オゾンガスモニターなどからなる。伊勢崎消防署(同市今泉町)に

消毒室を設けて配備した。出動した救急隊員がオゾンガスを充填させた部屋に入り、オゾン水で手洗いするなどして全身殺菌する。救急車内にはオゾン発生器を持ち込んで殺菌する。20分ほどで100%近くを殺菌できる。電気だけ

で動かせ、薬剤なども不要。防護服も殺菌できるため、再利用が可能となる。新型インフルエンザに限らず、結核菌や黄色ブドウ球菌などほとんどの細菌やウ

イルスに対応できるという。全国では大阪府の富田林市消防本部や埼玉県狭山市消防本部などで導入されている。



桐生市の旧郷土資料展示ホール敷地

桐生ガスへ売却

建物解体後
453万円

桐生市は1日までに、老朽化により閉鎖した「郷土資料展示ホール」(同市本町)の敷地の売却対象者を桐生ガス(同市仲町、塚越紀隆社長)に決めた。建物解体が条件で、売却額は453万2千円。同社は同ホールの隣接地でショールームなどを備えた桐生ガスプラザを運営しているが、利用方法はこれから検討することとしている。

市財政課などによると、同ホールの建物は1969年に建設された鉄筋コンクリート地上5階地下1階で、敷地面積は約555平方メートル。市中心街にあり、地元商店街が商業施設として建設、一時デパートが営業していたが、89年までに市の所有となった。85年に同ホールが開設され、作品展などに利用されたが、老朽化が著しく、耐震面での問題もあったことから3月末で閉鎖された。

建物解体に6千万円程度が見込まれ、耐震改修による利用も困難と判断した市は、取得希望者に1年以内の取り壊し条件を付けて売却することにした。7月に公募したところ、市内の2社から応募があり、審査の結果、同社に決定した。今月中旬にも市と同社が契約を結ぶことになる。

売却先が桐生ガスに決まった旧郷土資料展示ホール

化学療法センター開所

がん診療の機能そろう

伊勢崎市民病院

伊勢崎市が運営する市民病院の本館増築工事が終わ

り、1日、薬剤投与によりがん治療を行う外来化学療法センターがオープンした。今年4月に開設された緩和ケア病棟、9月24日に運用が始まった内視鏡センターと合わせてがん診療の設備・機能がそろった。

一方の内視鏡は、プライマリ、内視鏡室5室などを整備。系がんの検診している。両センターのより、厚生労働省が認定されたがん診療院としての機能

伊勢崎市民病院の本館増築工事が終わ

